

---

## 謝 辞

佐 藤 達 郎

新見肇子先生は、本学にご着任以来、二十三年にわたり教鞭をとられたが、私は、その後半の十年余りの間、先生と英文学科でのお仕事をさせていただくという幸運に恵まれた。この間、新見先生は、大学評議員、学生生活部長、生涯教育センター所長の要職を歴任されるとともに、教育面では、卒業論文の指導は勿論のこと、イギリス文学史、英語論文作成法といった主要科目を担当されるなど、文字通りイギリス分野の大黒柱として、英文学科を支えてこられた。又、大学院教育においても、その深い学識と熱心な指導によって、多くのイギリス・ロマン派の若手研究者の育成につとめられた。何事にもひたむきに取り組まれる新見先生は、学科の公務においても、最後まで誠実にひとつひとつの問題を処理された。言葉にこそ出されなかったが、みずからの行動を通じて、教員としての態度を後進に示そうとなさっていたのだと思う。又、先生の教育面における厳正な姿勢は、その教えを受けたものに、厳しさこそが本当の暖かさであることを伝えていた。

多忙な日々を過ごされたのにもかかわらず、先生は着実にご自分の研究を進められ、2006年には、英語論文による単著 *Blake's Dialogic Texts* を上梓され、又2010年には、『シャーロット・スミスの詩の世界——ミューズへの不満』を刊行された。イギリス・ロマン派研究については門外漢である私が、先生のご研究について一言でも述べることは、僭越のそしりを免れないが、それでもひとりの読者として、『シャーロット・スミスの詩の世

---

---

界』のご翻訳に深い感銘を受けたことは告白しなければならない。この翻訳は、厳密な学問的姿勢と鋭い感性により、これまで耳を傾けられることのなかった女流詩人の声を、ひとつひとつ丁寧にすくいあげた名訳である。また、その翻訳に「あとがき」として付された三つの論文は、シャーロット・スミスの詩の世界の最良の手引きとなるばかりでなく、それがそのままロマン派研究における「もうひとつの文学史」となっている点で特筆に値する。日本の英文学研究史に残る一冊として、今後イギリス・ロマン派研究において重要な役割を果たすであろう。近年、研究業績と教育業績をやたらに分けたがる奇妙な習慣が横行しているが、新見先生にあっては、そうした分割はおおよそ無縁であった。知徳合一ということだが、ともすれば軽視されがちな現在の大学教育にあって、本来の教員としてのあるべき姿を、身を持って示していただいたことに、英文学科の一員としてこころより謝意を表したい。

失礼を顧みず、先生のご厚意に甘えいつも気軽に助言をもとめてきた私であったが、あの参考資料室の手前の部屋のドアをそのようにノックできないことを思うと誠にさびしい限りである。さらなるご健筆とご健勝をお祈り申し上げるとともに、今後も英文学科をお見守りくださいますようこころよりお願い申し上げます。

---